様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００７２９

研究課題名（和文）日本語多読教材と学習者及び教師の意識変容に関する研究：読む意義を問い直す

研究課題名（英文）A Study on Japanese Extensive Reading Materials and the Transformation of Learners' and Teachers' Awareness: Reevaluating the Significance of Reading

研究代表者
池田　庸子（Ikeda, Yoko）

茨城大学・人文社会・教授

研究者番号：３０２８８８６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語多読教育における、学習者、教師、教材に関して包括的かつ探索的調査・分析を行った。（１）学習者にインタビュー調査を行い、読書が苦手な学習者であっても多読経験を通じて読書を肯定的に捉える意識の変化が見られたことを明らかにした。（２）多読実践を行っている教師は、多読について大学カリキュラムにおいても、学習者個人への対応においても、多様な学習者を受け入れるインクルーシブな学びとして捉えられていることを指摘した。（３）多読教材に関しては、日本語段階別読み物に関する語彙・難易度・ジャンルに関する包括的な分析を行うとともに、日本語段階別読み物を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本語教育における多読教育の可能性について、学習者、教師、多読教材に関して包括的な研究を行った。本研究では、多読の経験が学習者や教員にどのような意識の変容をもたらしたか調査し、読む過程自体を楽しむ学習者の意識の変容や、多様な学習者が共に学ぶことを可能にする方法として多読の可能性を指摘した。
　さらに理解しながら楽しく読むことを可能にする段階別読み物とはどのような読み物か、出版されている日本語段階別読み物の語彙や難易度等も分析し、日本語の段階別読み物作成のための基礎研究を行うとともに、初級日本語学習者用の段階別読み物を作成した。

研究成果の概要（英文）：In this study, a comprehensive and exploratory investigation and analysis were conducted regarding Japanese language learners, teachers, and Japanese graded readers. (1) Interviews with learners revealed that even those who struggled with reading experienced a positive shift in their perception of reading through extensive reading. (2) Teachers practicing extensive reading indicated that extensive reading is viewed as an inclusive learning approach that accommodates diverse learners, both in university curricula and individual learner support. (3) Regarding extensive reading materials, a comprehensive analysis of vocabulary, difficulty levels, and genres in Japanese graded readers was conducted, along with the creation of Japanese graded reading materials.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育　多読　初級　教材作成　実践研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現在、自動翻訳ソフトを用いればクリック一つで外国語の文章を母語で読める時代になり、苦労して外国語を習得しなくても理解することが可能になった。外国語教育において、必要性は外国語習得のための大きな動機であったが、これからの外国語教育では、なぜあえて外国語で読むのかという問いに対し、必要性以外の答えを示すことが求められるようになった。学習者にとって外国語で読むことの意義とは何か、再度検証する必要がある。

必要性に代わる意義は何か。本研究では「読みたいから読む」すなわち読むこと自体に意義があるという仮説を立て、その「読みたい」意欲を喚起し継続させる方策として、多読教育に着目した。多読とは、辞書なしでも十分に理解できる易しい本を楽しく、速く読むことである（国際多読教育学会)。日本語の段階別読み物は 2000 年代初頭に NPO 法人日本語多読研究会（現 NPO 多言語多読）がレベル別の日本語の段階別読み物の作成を開始し、2006 年以降『レベル別日本語多読ライブラリーにほんごよむよむ文庫』シリーズや『日本語多読ブックス』シリーズが出版されるようになり、日本語教育においても初級レベルからの多読実践が可能となった。しかし、古くは 1950 年代から、多くの段階別読み物が出版され、多読の実践も研究も進んでいる英語多読に比べると、日本語多読は図書も少なく、多読実践や研究も発展途中と言える状況である。

２．研究の目的

多読が学習者にどのような変容をもたらすか、学習者、多読用段階別読み物、多読を実践する教師を対象とした研究を行う。以下に各研究の目的を述べる。

①学習者が読むことに対してどのような意識を持ち、それが多読を通じてどのように変容するか明らかにする。日本語学習者の読書習慣、環境、興味、読む目的など、読むことに関する総合的かつ探索的な調査を行い、現代の学習者の置かれた課題を抽出する。さらに学習者が読むことに対してどのような意識を持ち、それが多読経験を通じてどのように変化したかを明らかにする。

②日本語段階別読み物を対象とした包括的な調査分析を行う。段階別読み物は本格的な多読を可能にする基礎であり、一冊の本との出会いは学習者の読書に対する態度や習慣に影響を与える可能性を秘めている。学習者が自律的に多読を継続するかどうかは、いかに次に読みたいと思える本があるかによるところも大きいが、日本語の段階別読み物に関する研究は限られているため、本研究では、段階別読み物の文法及び語彙の難易度のデータの構築を行うとともに、ジャンル、挿絵やイラストの効果など、学習者と教師の教材評価を基にした教材分析を試みる。日本語教育における段階別読み物の内容や文法、語彙の難易度を分析し公表する。

③多読教育を実践している日本語教師を対象に、教師側から見た多読の効果と意義、教育環境や授業実践に関する成果や課題を明らかにする。多読の授業では、教師が学習者に教えるといった従来の教授方法とは大きく異なるため、教師がどのようなビリーフを持って多読を実践しているのか調査することで、多読授業の可能性と課題を抽出する。

上記の研究で得られた結果を基に、学習者、教師、教材の影響や相互作用に関する調査分析を行う。日本語教育における多読教育を多角的に検証することで、学習者の読みたいと思う意欲及び、読解の意義を再検証する。さらに、現在使用されている段階別読み物を分類・分析することで今後の多読授業実践に必要な基礎データの構築を行い、さらに多読授業の普及を図れるよう提言を行う。

３．研究の方法

①学習者を対象とした研究方法

日本語学習者を対象にアンケート及び半構造化インタビューを用いた質的調査を実施した。インタビュー協力者の了解を得て、IC レコーダーにインタビュー内容を録音し、それを文字化した。インタビューでは、日本語学習歴、子供の時の読書体験、中学・高校での読書習慣、読書を好きな（嫌いな）理由、読書に関する意識の変化など、調査者の質問をもとに自由に語ってもらった。インタビュー協力者個人の変容について分析したほか、複数の協力者に共通した言及に関して比較分析を行った。

②段階別読み物を対象とした研究方法

日本語段階別読み物の難易度や語彙の調査に関しては、「やさにちチェッカー」と「オンライン日本語テキスト語彙分析器 J-LEX」(菅長・松下 2013)を使用して、段階別読み物の文法及び語彙の難易度のデータの構築を行った。さらに、学習者が各読み物に対してどのような印象を抱いたか明らかにするために、個別の読み物についてアンケート調査を行うとともに、読み物のどこが読みにくかったか、なぜそう感じたか聞き取り調査を行った。数量的な分析と学習者の受容の

調査を基に多角的な教材分析を行った。

③多読を実践する教師を対象とした研究方法
　アメリカで多読教育を実践している日本語教師と日本国内で多読を実践している日本語教師を対象に、半構造化インタビューを用いた質的調査を実施した。インタビューは調査協力者の許可を得て録画し，筆者が文字化した。インタビューはそれぞれ1時間半から2時間行った。インタビューを文字化したものは調査協力者に確認・修正を依頼し、各教師の語りに共通する項目及び独自の項目を抽出し、分析を試みた。

４．研究成果
①学習者を対象にした研究に関する成果
　日本語初中級学習者を対象として行った多読授業における学習者の読書習慣に関する意識、及び自己評価アンケートの結果を分析した。まず、多読授業実施前に行った学習者の読書習慣に関するアンケートから、日本語でも母語でも読書習慣のない学習者が一定数いることが分かった。日本語で読まない理由として、「まだ読めないから」、「読むことに興味がないから」などの理由を挙げており、読むための支援が必要であることが示唆された。授業終了時に行った自己評価アンケートでは、多読授業を通じて、単語の知識や読むスピードが伸びた点を高く自己評価しており、多読が効果的だったと考えていることが明らかとなった。
　また、読むことが好きでないと言う学生3名のインタビューをもとに、彼らの読書習慣や読むことへの意識、多読による意識の変化に関して考察した。その結果、読まない理由として、読むよりも映画やビデオなどの動画のほうが分かりやすいからと考えていることがわかった。分かりにくさの原因にはひらがな・カタカナ・漢字など文字の種類も多く、文字認識の難しさが挙げられていた。しかしながら、多読を通して読むことに慣れるにつれて、文字や言葉の認識能力が向上し、早く読めるようになったと感じていた。また読書が好きでないと言っていた学習者でも、読む経験を積むことで、この分野なら読みたいというように少しずつ本を読みたいという意識に変化していることが明らかになった。
　さらに、上級学習者を対象に、多読の授業の読書傾向と、やさしい読み物である段階別読み物を読む意義をどのように捉えているかを、一学期間の読書レポートを通じ分析した。上級学習者が一学期間に読んだ読み物のうち、段階別は約6割を占めた。読書レポートによると、1～2週目には「論文のために資料を読むことは苦しいが、段階別は楽しい」、 4～5週目は「段階別読み物の古典の作品を読んだ。もっと古典が読みたい」というように、多読の魅力に気付き、ジャンルの豊富さから段階別を選んでいる学習者がいることが分かった。さらに学期の後半には、「段階別読み物は速く読める」というように読みの流暢さの向上を自ら認識することができており、上級レベルであってもやさしい教材を読むことに意義を見出し、積極的に選択していることが明らかとなった。

②日本語段階別読み物の研究に関する成果
　現在出版されている日本語段階別読み物について調査した。日本語の段階別読み物はオンラインで公表されているものを含めると増えてきてはいるものの、英語の段階別読み物に比べると数が圧倒的に不足していること、正確な単語リストに基づいたレベル分けが行われていないことを指摘した。また、多読授業の履修者の読書記録を分析し、選書傾向、本の理解度、面白さの評価を分析した。分析結果からは、日本語力の低い学習者には母語話者向けの本は適切な多読教材とは言い難いこと，今後日本語学習者のための多読教材を質量両面での充実する必要性があることも示唆された。
　上記の分析結果に基づき、初級レベルの段階別読み物の開発を行った。段階別読み物は、発表者が所属する機関で使用している初級教科書の課ごとに、レベルを定めた。難易度については、既知語率と文法を考慮した。Laufer & Ravenhorst-Kalovski (2010)は適切な内容理解のためには最低で95%の既知語率を唱えている。そのため、語彙はその課までに導入されたものを95%以上、文法はその課までに導入された文法のみを使用することとした。教材は総ルビとし、学習者の理解を助けるために各ページに挿絵も入れた。これらの手順を踏み、初級学習者用の段階別読み物を作成した。読み物では、歌舞伎などの伝統芸能の紹介から、昔話、日本各地の紹介、花見や河童などを扱った物語など、幅広い内容を扱い、多読を通して多様な文化に触れられるようにした。また、ストーリー展開や「落ち」なども考慮しながら、楽しみながら読める読み物、すなわち、学習者の自律的な学びを支援する段階別読み物を作成した。

③教師を対象とした研究に関する成果
　アメリカの大学で多読実践を行う日本語教師３名にインタビューを行った結果、彼らの語りに共通した内容として、１）多読を始めた背景には、従来の日本語授業では対応できないことがあると教師が感じており、その対応策の一つとして多読に可能性を感じていた、２）教師による指導と学習者主体の自律学習との間でバランスをとることが難しいと感じている、３）評価などの点で、日本語教育全般に対する考え方にも影響をうけた、４）多様な学生を受け入れることができることに多読の意義を感じている。多読授業における授業の工夫や教師の葛藤、気づき、日本語教育全般に対する新たな問いなどを教師コミュニティの中で共有し、教師が共に考えてい

くことが重要であることを指摘した。
　日本の国内で多読実践を行う日本語教師３名に対するインタビュー調査からは、彼らの語りに共通した内容として、１）多読授業を始めた背景には、多様な学習者への対応が必要であったこと、２）学習者のやる気や態度など学習面以外でもポジティブな変化が認められること、３）教師の役割について戸惑うこともある一方で、教師のサポートなしでは多読の継続は難しく、支援の重要性も感じていること、４）お互いの意見や思いなどが共有できる場が重要であること、などが語られた。アメリカと日本で教える教員に共通する点として、高校生や生活者も含めたより多様性の高い学習者が共に学び、成長する場として多読が有効であると認識していることが明らかとなった。

④国際シンポジウムの開催
　2021 年 3 月 27 日に国際シンポジウム「日本語教育における多読・速読の理論と実践―多読と速読で読みの流暢さを伸ばそう！―」を別の科研費チーム（課題番号 19H01270, 研究代表者：渡部倫子）と共同で開催し、国内外から当日 275 名の参加があった。専用サイトには公開 1 か月で 900 を超える訪問があり、多読研究及び実践方法を広く紹介し、議論を深めることができた。2022 年 12 月 2 日には、海外から研究者を招聘し、英語多読の研究者と連携して『第二言語習得における多読の実践と研究』という題目で、公開シンポジウムを開催し、多読研究を多角的に検証すると同時に、多読の普及に向けた提言を行った。

参考文献：
国際多読教育学会.(n.d.)『国際多読教育学会による多読指導ガイド』
https://erfoundation.org/guide/ERF_GuideJ.pdf（最終閲覧日：2023 年 12 月 3 日）
NPO 日本語多読研究会.(2006-2012)『レベル別日本語多読ライブラリーにほんごよむよむ文庫』アスク出版
NPO 多言語多読.(2012-)『にほんご多読ブックス』大修館書店
NPO 多言語多読.(2012-)『レベル別日本語多読ライブラリーにほんごよむよむ文庫』アスク出版
菅長陽一・松下達彦.(2013)「日本語テキスト語彙分析器 J-LEX」
http://www17408ui.sakura.ne.jp/
李在鎬.(2016)「日本語教育のための文章難易度研究」『早稲田日本語教育学』Vol. 21, 1-16.
Laufer, B., & Ravenhorst Kalovski, G. C. (2010). Lexical threshold revisited: Lexicaltext coverage, learners' vocabulary size and reading comprehension. *Reading in a Foreign Language*, 22(1), 15-30

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>池田庸子・坂野永理・坂井美恵子 | ４．巻<br>7 |
| ２．論文標題<br>日本語段階別読み物の作成に関する一考察 | ５．発行年<br>2024年 |
| ３．雑誌名<br>茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究 | ６．最初と最後の頁<br>53-61 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>池田庸子 | ４．巻<br>6 |
| ２．論文標題<br>多読授業を実践する日本語教師の意識の変容－日本で教える教師の語り－ | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究 | ６．最初と最後の頁<br>11-22 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>坂井美恵子・池田庸子 | ４．巻<br>26 |
| ２．論文標題<br>オンラインへの移行に伴う多読授業の新たな試みと評価 | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>ヨーロッパ日本語教育 | ６．最初と最後の頁<br>ー |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Tabata-Sandom, M., Banno, E., & Watanabe, T. | ４．巻<br>10 |
| ２．論文標題<br>The integrated effects of extensive reading and speed reading on L2 Japanese learners' reading fluency | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>Journal of Extensive Reading | ６．最初と最後の頁<br>1-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>池田庸子 | 4．巻<br>5 |
| 2．論文標題<br>多読授業を実践する日本語教師の意識の変容－アメリカの大学で教える教師の語り－ | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究 | 6．最初と最後の頁<br>81-94 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>坂井美恵子 | 4．巻<br>8-1 |
| 2．論文標題<br>日本語上級レベル学習者の多読の読書傾向と段階別読み物を読む理由 | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>九州地区国立大学教育系・文系研究論文集 | 6．最初と最後の頁<br>1-11 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>池田庸子 | 4．巻<br>4 |
| 2．論文標題<br>読書が苦手な学習者の語りからみた多読授業の効果と影響 | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究 | 6．最初と最後の頁<br>39-46 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>坂井美恵子 | 4．巻<br>- |
| 2．論文標題<br>多読における上級レベル学習者の読書傾向とやさしい本を読む理由 | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>2020年度日本語教育学会関東支部集会予稿集 | 6．最初と最後の頁<br>15-20 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Mitsue Tabata-Sandom | 4．巻<br>32(1) |
| 2．論文標題<br>Reviewed work: Teaching Extensive Reading in Another Language | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>Reading in a Foreign Language | 6．最初と最後の頁<br>61-64 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>池田庸子 | 4．巻<br>3 |
| 2．論文標題<br>日本語多読授業における学習者の自己評価 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究 | 6．最初と最後の頁<br>45-52 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>坂野永理 | 4．巻<br>4 |
| 2．論文標題<br>日本語学習者による多読用書籍の選書とその評価 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要 | 6．最初と最後の頁<br>88-100 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>坂井美恵子・池田庸子 |
| 2．発表標題<br>オンラインへの移行に伴う多読授業の新たな試みと評価 |
| 3．学会等名<br>ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会） |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mitsue Tabata-Sandom |
| ２．発表標題<br>Advanced L2 English learners’ experiences of a one-year online extensive reading project |
| ３．学会等名<br>ALANZ-ALAA-ALRAANZ Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Yoko Ikeda, Eri Banno, Mieko Sakai |
| ２．発表標題<br>Current Issues and Development of Graded Readers for Japanese Language Learners |
| ３．学会等名<br>Extensive Reading Around the World 2021（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mitsue Tabata-Sandom |
| ２．発表標題<br>Learning to read in English: Experiences of online extensive reading from nine mature L2 English learners living in NZ |
| ３．学会等名<br>The 17th National Conference for Community Languages and ESOL (CLESOL) |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mitsue Tabata-Sandom |
| ２．発表標題<br>An autoethnographic study of an advanced learner of English: My L2 identity in reading and listening |
| ３．学会等名<br>Applied Linguistics in Aotearoa New Zealand (ALANZ) Symposium 2021（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>坂井美恵子 |
| ２．発表標題<br>多読における上級レベル学習者の読書傾向とやさしい本を読む理由 |
| ３．学会等名<br>2020 年度日本語教育学会関東支部集会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>坂野永理 |
| ２．発表標題<br>多読教材の開発 |
| ３．学会等名<br>国際シンポジウム：日本語教育における多読・速読の理論と実践 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>池田庸子 |
| ２．発表標題<br>多読支援のための授業活動と創作プロジェクト |
| ３．学会等名<br>国際シンポジウム：日本語教育における多読・速読の理論と実践 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>岩見晴子 |
| ２．発表標題<br>多読授業の学生が楽しく読み続けられるようにー教師の工夫ー |
| ３．学会等名<br>国際シンポジウム：日本語教育における多読・速読の理論と実践 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mitsue Tabata-Sandom |
| ２．発表標題<br>流暢さを高めるためにはどうすればいいか |
| ３．学会等名<br>国際シンポジウム：日本語教育における多読・速読の理論と実践 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mitsue Tabata-Sandom |
| ２．発表標題<br>やってみよう！速読体験 |
| ３．学会等名<br>国際シンポジウム：日本語教育における多読・速読の理論と実践 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>坂野永理、池田庸子、坂井美恵子 |
| ２．発表標題<br>初級学習者用多読教材の開発 |
| ３．学会等名<br>第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mieko Sakai, Yoko Ikeda, Eri Banno |
| ２．発表標題<br>Creating effective Japanese graded readers for elementary learners |
| ３．学会等名<br>Extensive Reading Around the World（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mitsue Tabata-Sandom, Yoko Ikeda |
| ２．発表標題<br>Impact of ER Experiences on L2 Japanese Teacher Perceptions |
| ３．学会等名<br>JALT2023 International Conference |
| ４．発表年<br>2023年 |

〔図書〕　計4件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>坂野永理・池田庸子・品川恭子・坂井美恵子 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>The Japan Times出版 | ５．総ページ数<br>244 |
| ３．書名<br>初級日本語よみもの げんき多読ブックスVol.1 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>坂野永理・池田庸子・品川恭子・坂井美恵子 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>The Japan Times出版 | ５．総ページ数<br>268 |
| ３．書名<br>初級日本語よみもの げんき多読ブックスVol.2 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>坂野永理・池田庸子・品川恭子・坂井美恵子 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>The Japan Times出版 | ５．総ページ数<br>264 |
| ３．書名<br>初級日本語よみもの げんき多読ブックスVol.3 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>坂野永理・池田庸子・品川恭子・坂井美恵子 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>The Japan Times出版 | ５．総ページ数<br>248 |
| ３．書名<br>初級日本語よみもの げんき多読ブックスVol.4 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

初級多読教材
http://genkireading.sakura.ne.jp/genki-books/

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 坂野　永理<br>(Banno Eri)<br>(30271406) | 岡山大学・全学教育・学生支援機構・特命教授<br>(15301) | |
| 研究分担者 | 坂井　美恵子<br>(Sakai Mieko)<br>(60288868) | 大分大学・国際教育研究推進機構・教授<br>(17501) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

| | |
|---|---|
| 国際研究集会<br>多読研究集会 | 開催年<br>2022年～2022年 |
| 国際研究集会<br>日本語教育における多読・速読の理論と実践―多読と速読で読みの流暢さを伸ばそう！― | 開催年<br>2021年～2021年 |

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |